

多義を記述するために：多義構造と辞書記述のテキスト構造

著者	山口 治彦
雑誌名	神戸外大論叢
巻	52
号	2
ページ	61-91
発行年	2001-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001194/



多義を記述するために¹

——多義構造と辞書記述のテキスト構造——

山 口 治 彦

1. はじめに

多義語の意味をどのように分類し記述するかは、辞書を編むうえで中心的な課題である。多義語がもつ意味の総体を個々の意義に分割し、順序を定めて紙の媒体に配列していくという作業は、辞書編纂にはあまりに当たり前の作業ではあるものの、意味というかたちのない対象を扱うだけに、また、体系的な理論に裏打ちされた決定的な手順が存在しないために、良心的な辞書執筆者を常に悩ませることになる。

たしかに、近年、意味の拡張に関する言語学の知見は深まり、多義を分析する手法は発展を遂げた。また、多義語を辞書に記述する方法についても、ここ数年に刊行された辞書のいくつかには注目すべき成果があるのも事実である。しかし、現在手に入る辞書を総じて眺めた場合、多義に関する辞書の記述は依然としてじゅうぶんなものとはいえない。外国語学習者が多義語に関して辞書から得る情報は、断片化された意味の集積に過ぎない場合が多いのである。それどころか、現在主流を占める学習者用英英辞典のなかには、多義語がもつ意味の広がりや同音異義語のあいだに見られる意味の断絶をないがしろにする潮流すら見受けられる。

はたして、多義はどのように記述されるべきなのだろうか。小稿では、現

1 本稿は、第18回日本英語学会シンポジウム「多義語の記述：理論と方法」（瀬戸賢一司会、2000年11月18日、甲南大学）における口頭発表「多義語はどのように記述されてきたか」の一部に加筆したものである。多義語辞典編修に関する共同研究者、瀬戸賢一・武田勝昭・小森道彦・辻本智子・安井泉ら各氏との議論に触発されるところが大きかった。感謝したい。

行の学習者用英語辞典に見られる多義記述の現状を見据え、英語辞典が多義記述に関してとるべき方向性について考えたい。論文の構成は以下の通りである。

まず、次節では、辞書記述の実際に立ち入る前に、多義語の意義構造について本稿が前提とする立場を略述する。理論的前提を先に示すことで、本稿が辞書を論評する際の視点が明らかになると考えるからである。次いで3節では、定義のテキストとしての形態の違い——文や節のかたちで説明するのか、語レベルのパラフレーズで定義をおこなうのか——が、多義語の意義構造を記述するうえで大きく影響することをテキストの結束性に着目しながら指摘する。そして、4節および5節では、多義語が現行の英語辞書にどのように記述されているのかを子細に点検する。説明的定義のもつアドバンテージを生かし切れていない学習者用英英辞典の現状(4節)と語レベルの定義がもつハンディキャップを克服しようとする英和辞典の動向(5節)を探ってみたい。このような分析を通して、多義記述に関して学習者向けの英語辞典がとるべき方向性がおのずと明らかになることと思う。

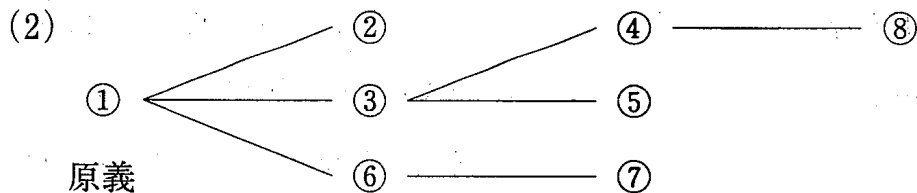
2. 多義構造：意義のネットワークと転義のかたち

語彙的な多義現象について本稿が依拠する立場は(1)のように要約できる。

- (1) a. 多義語の各意義は、特定の意義を中心として放射線状に広がる共時的ネットワーク構造をかたちづくる
- b. ネットワークのリンクは、おおむねメタファー (metaphor)、メトニミー (metonymy)、シネクドキー (synecdoche) の3つの転義形式に限定される

まず、(1a)について簡単に触れておく。多義語が、複数の意味をもちな

がらもひとつの語として認識されるのは、各意義のあいだに関連性が認められ、ひとつのまとまりとして認知されているからにはほかならない。事実、たいていの多義語については、ひとつの原義から別の意義へ（そしてさらに別の意義へ）と拡張していった歴史的変遷をたどることができる。つまり、多義語の意義は、原義という始発点から次の分節点（＝拡張された意義）へと、分節点間の局所的関連性にもとづいて通時的に広がりゆく構造をもっている。このような通時的多義構造の概略を図示すると、たとえば、次のようになる。①が原義で、番号は意義拡張の歴史的順序に対応している。

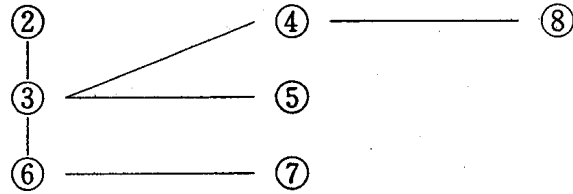


しかし、一般の話者がそのような通時的構造性を常に意識しているわけではない。歴史的発展の過程と話者の直感が異なるときもあれば、原義やそのほかの意義が廃用になっていることもある。それでも多義語がひとつの語として認知されるのは、現存する各意義間に現時点における関連性を認めているからである。つまり、多義語が本来もっていた通時的な意義関連構造を母国語話者は必要に応じて共時的に読み替えているのである。多義語の共時的意義構造がこのように通時的構造を（必要に応じて）読み替えたものであるなら、両者が構造的にまったく異なったものと想定するのは不合理である。実際、両者が同一の場合もありえる。そこで、共時的な多義構造も、ひとつの意義（＝中心義）から他の意義へと放射状に広がるネットワーク構造をなすものと仮定する。

次の(3)は、(2)の原義が廃用になった場合を想定してみた。(2)において原義と同様に節点の多かった③の意義を中心義として、通時的構造を読み替えると、たとえば、このようなものになる。

(3)

[①]



上記 (1a) の立場に (少なくとも部分的に) 対立するものとして、多義語の各意義のあいだに共通部分を求めようとするアプローチが挙げられる。各意義に共通部分があるからこそ多義語はひとまとまりのものとして認識される、とするわけである。たとえば、田中 (1990) はそのような共通部分のことをコア (core) と呼び、これを多義語の意味分析の中心に据えている。

本稿がコアのような考え方を採らない理由は、メトニミーが関与する場合に共通部分を維持しがたいからである。neck という語を例にとって考えてみよう。身体部位としての「首」とそのメタファー的拡張である「ビンの首」や「岬」との共通部分をとらえるためには、＜細く突き出た部分＞という上位カテゴリーを設ければよいかもしれない。では、「首」のメトニミー的拡張である「(衣服の) えり首」と上記の意義群とのあいだに共通項を認めることができるだろうか。たとえば、「V ネック」は「首」に接するだけで、細く突き出ているわけではない。現実世界における隣接関係を機軸とするメトニミーがメタファーやシネクドキーと共存するとき、コア的な発想は破綻するのである。各意義に共通する意味を求めることに無理があるのであれば、多義語の意味とは、2つの個々の意義のあいだに見られる局所的な結びつきの総和であるとするよりない。

(1b) に関しては、さらに異論があるかもしれない。ヤコブソン以来、私たちの言語や認識の作用に大きくかかわる転義形式はメタファーとメトニミーであるとする二元論が主流であるからである (瀬戸 (1997a) を参照)。しかし、本稿は、瀬戸 (1997a, 1997b, 1999, 2001) にならい、シネクドキーを含めた3項対立によって転義関係を記述するのが適当と考える。詳述は避けるが、その理由として以下の2点を上げる。

第一に、シネクドキー（提喩）はメトニミー（換喩）と従来よく混同されてきたものの、両者のあいだには明確な区別を設けることができる（佐藤（1978））。メトニミーは、たとえば、neckが「首」から「えり」へ、bottleが「ビン」から「その中身」へと拡張されるように、現実世界における隣接（包含）関係をもとにした転義である。これに対し、シネクドキーは、eggが「卵」一般から「（食用の）鶏卵」へ特殊化されたり、zerocopyが商標名から「コピー機」一般へと拡張されたりするように、類から種へ、種から類への意味カテゴリー上の変換であると規定できる。シネクドキーは独立するだけの存在理由をもちあわせているのである。

次に、意味の歴史的発達に関する研究においては、一般化（generalization）と特殊化（specialization）という名称で、シネクドキーが早くから認知されていた（たとえば柴田（1975）を参照）。一般化は種から類への、そして特殊化は類から種へのシネクドキーにあたる。Geeraerts（1994）は一般化と特殊化にメタファー・メトニミーをくわえ、これを歴史的意義発展の古典的4重奏（the classical quartet）と呼んでいるが、これはメタファー・メトニミー・シネクドキーの3項対立にほかならない。このように、多義語の各意義がメタファー・メトニミー・シネクドキーによる通時的ネットワークを形成するとするならば、現代語の話者がそれを共時的に読み替える際にわざわざ別の材料を用いたとするのはあまりに不合理である。したがって、多義語の共時的意義ネットワークも、メタファー・メトニミー・シネクドキーの3つによって支えられていると仮定しておいてよいだろう。

さて、多義語の意味が上述の（1）のようなネットワーク構造をもつのであれば、多義語の意味の総体を伝えるには、各意義の関係を記述していくほかに方法はないことになる。つまり、多義語の意味を過不足なく記述するためには、ある意義がどの意義から拡張しているのか、そしてそのふたつの意義がどのような関係で結びついているのかを記述することが必要になる。各意義間の局所的関連性を記述する、これが多義記述の基本である。以下では、

現行の辞書が多義語の個々の意義をどのようなかたちで関連づけているのかを検証する。

3. テキストとしての定義：説明的定義の優位性

3.1 説明的な定義が可能にするもの：辞書記述のテキスト分析

さて、多義語の意義構造が(2)や(3)のような広がりをもつのであれば、紙の媒体を利用する辞書が多義語を記述する際には必然的に問題が起こる。多義語の意義構造は2次元的な広がりをもつものに対して、ことばの線状性に支配される辞書の記述は、基本的には前から後ろへ(左から右へ)と連なる1次元的な構造をもつことになるからである。したがって、多義の記述にいくらかでも注意を払うならば、辞書の記述に構造性を与えたり、ことばの線状性がもたらす障壁を乗り越えて意義の関係づけをおこなうような工夫が必要になる。

多義記述の工夫について考えるうえで留意すべきは、定義方法の違いによって、個々の意義を関連づけられる度合いに大きく差が出るという事実である。一般の英和辞典は、バイリンガル辞書の特長を生かし、語義の定義を訳語を示すことによっておこなう。これに対し、モノリンガル辞書では、語単位のパラフレーズによって語義が示される場合もあるが、定義を節や文のかたちで説明的におこなうことも多い。この傾向は、学習者用英英辞典において特に強い。

では、どちらが多義語の記述に有利であるだろうか。当然のことながら、定義を節もしくは文のかたちで説明するほうが、語単位でパラフレーズするよりも、個々の意義間の関係を明示しやすいはずである。たとえば、*Longman Dictionary of Contemporary English, 3rd edition* (LDOCE 3) と *Cambridge International Dictionary of English* (CIDE) は、形容詞 healthy の量の多さを表す意味 (ex. a healthy profit) について次のように説明している。

- (4) a. large and showing that someone is successful (LDOCE 3)
b. A healthy amount of something is a large amount of it, that
shows success (CIDE)

(4a) は、LDOCE3における healthy の 7 番目の定義である。この定義からだけでも healthy の中心義とこの意義との関連は読みとれるが、5 番目の定義として挙げられている “a healthy company, society, economic system etc is working effectively and successfully” という定義とあわせると、さらにわかりやすい。successful, successfully と双方の定義において語を重ねたうえで、“showing that someone is successful” と解説してあるので、原因で結果をいうメトニミーがこの意義にかかわっていることが分かる。つまり、healthy のこの意味は、経営状態などがよいという原因によって利益などの量が多いという結果を表現しているのである。

これに対して、英和辞典における定義は、おおよそ「<量・大きさ・数などが>かなりの；でっかい；強力な」（『ジーニアス英和辞典』2 版）、「大量の、かなりの」（『プログレッシブ英和辞典』3 版）という訳語を与えるのみで、「健康な・健全な」という中心的な意義との関係をつけづらい。多義語に見られる意義拡張を説明するという点では、明らかに説明的な定義のほうに分がある。

説明的定義が多義構造を記述するのに有利であるのは、説明的定義のほうが語単位のパラフレーズよりも多くの情報量を伝えうるという単純な事実のみに由来するのではない。ここで強調しておきたいのは、節や文レベルの定義を採用したほうが、テキストの結束性 (cohesion) を利用することによって、個々の定義を明示的に関係づけられるという事実である。ひとつの多義語にかかわる定義の総体をテキストとして眺めた場合、節や文レベルの定義を連ねたほうが、談話としての形式的・意味的なまとまりを得やすく、ひいては、個々の定義間に見られる関係を記述するのにも便利なのである。説明

的定義がもつ有利さには、このような言語上の裏付けがある。説明的定義に見られる結束性について、例を挙げて確認してみよう。

ハリデーは、結束性をもたらす要素として照応 (reference)・省略 (ellipsis)・接続 (conjunction)・語彙的結束性 (lexical cohesion) の4つを挙げている (Halliday (1994); Halliday and Hasan (1976))。このうち、(網羅的に調査したわけではないが) 照応・接続・語彙的結束性の3つは辞書の定義に見つけることができた。たとえば、先の healthy の例は successful (-ly) という語を重ねたことが、ふたつの定義の関係性を明示していた。これは、語彙的結束性を支える3つの下位項目——繰り返し (repetition), 同義関係 (synonymy), コロケーション (collocation)——のうちのひとつ、繰り返しをおこなった例である。さらに、この繰り返しを用いれば、中心義から複数の意義へと意味が拡張している様をとらえることができる。たとえば、動詞 fold に関する LDOCE 3の定義は次のようになっている。(語義番号1から3までの定義を抜粋; 下線は筆者による。以下同様)

- (5) fold/1 to bend a piece of paper, cloth etc by laying or pressing one part over another
- 2 to fold something several times so that it makes small neat shape
- 3 a) if something such as a piece of furniture folds in a particular way, it is designed so that part of it can be folded to make it smaller b) to fold or bend part of something such as a piece of furniture to make it smaller
- (LDOCE 3)

fold, bend, make small といった語彙が繰り返し使われている。特に、2番以降の定義には見出し語である fold をあえて使用している。したがっ

て、2 番の意義は 1 番の意義に参照せずには理解できない。1 番の意味（中心義）との関連が繰り返しによって明示されているのである。その結果、2 番の意義は、「折る」というプロセスによって「たたむ」という結果を表すメトニミー的意義拡張の例であることが読みとれる（so that という結果を表す構文を用いたこともこの読みに貢献している）。モノリンガルの辞書、特に説明定義をおこなう学習者用英英辞典には、テキストの結束性を利用した関係づけがしばしば見られる。

さらに、照応と接続を用いた定義の例をそれぞれ (6) と (7) に挙げる。

- (6) a. **enter**/4 to put your name on the list for an exam, a race, a competition, etc; to do this for sb (OALD 6)
- b. **poll**/1 a) an attempt to find out what the public think about something, espcecially about a political subject, done by questioning a large number of people b) a record of the result of this (LDOCE 3)
- (7) **picture**/1 A picture is a representation of something on a flat surface 2 A picture is also a photograph 3 A picture is also an image or view 4 A picture is also a situation or outlook (CEED)

(6) は、指示詞 this によって先行する定義との関連を明示している。隣り合った定義であれば、このような照応による言及も可能になる（さらに、図 1 における such の用法も参照）。(7) は副詞 also を定義に使用することによって、先頭に挙がっている定義と後続する定義とが互いに関わり合いのある、同種の内容を表すことを示している。つまり、1 の中心的意義に 2, 3, 4 の意義がそれぞれメタファーを介して結びついている様子が読みとれ

る。

このように、定義を文や節のかたちでおこなうと、多義語にかかわる複数の定義に対して、ひとつの談話としてのまとまりをもたせることが容易になる。辞書記述にはこのような談話現象としての側面もあるのである。多義のように構造化を有する現象は、やはり構造化の豊かなテキスト形式を採ったほうに分がある。語の連なり具合に関していえば、テキストは前から後ろへの線状形式を踏襲せざるをえない。しかし、ひとたびテキストとしてのまとまりもつと、意味のレベルにおいて線状性以外の構造化を獲得する。したがって、文や節のかたちをとる定義は、多義構造を自らがもつテキスト構造を利用して記述できるのである。

一方、定義の構成が語レベルでのパラフレーズに終始した場合、ほかの構造化の手法をとらないかぎり、定義は談話としてのまとまりを欠いた語の集積となるおそれがある。一般の英和辞典から学習者が手に入れる多義語の知識が断片化する傾向にある現状は、語レベルの定義方法に起因するところが多い。テキストとしての定義の断片化が、多義に関して伝えうる情報の断片化をもたらしているのである。定義をおこなうにあたって採用したテキスト形式は、定義が表現できる内容に必然的に影響するのである。

このように、辞書の定義を一片のテキストとしてとらえ、その談話上の性質に着目した場合、多義語の記述に関して説明的定義が優位であることは明らかである。この説明的定義の可能性を利用し、多義語記述に新しい機軸を打ち出したのが、1998年に出版された *The New Oxford Dictionary of English* (NODE) である。NODE は本稿が対象としている学習者用の辞書ではないが、ここで言及する価値はあるだろう。

3. 2 NODE の試み

NODE は、多義語の意義をコアセンス（意義核；core sense）とサブセンス（下位意義；subsense）のふたつに分類した。コアセンスとは、「現代の

標準的な英語において当該単語の典型的で中心的な用法」(ix)に裏打ちされた、「もっとも文字通りの」(ix)意義のことを指す。どの語も少なくともひとつのコアセンスをもっている。サブセンスは、このコアセンスから拡張された意義のことで、通例ひとつのコアセンスには複数のサブセンスがしたがえられている。図1は動詞popのNODEにおける記述である。

- pop¹** ▶ verb (**popped, popping**) **1** [no obj.] make a sudden, sharp, explosive sound: *corks popped, glasses tinkled, and delicate canapés were served.*
- [with obj.] cause (something) to burst, making such a sound: *some teenagers were popping balloons with darts.*
 - (of a person's ears) make a small popping sound within their head as pressure is equalized, typically because of a change of altitude.
 - [with obj.] heat (popcorn or another foodstuff) until it bursts open, making such a sound.
 - [no obj.] (of popcorn or another foodstuff) burst open in such a way.
 - (of a person's eyes) bulge or appear to bulge when opened wide, especially as an indication of surprise.
- 2** [no obj., with adverbial of direction] go somewhere, typically for a short time and often without notice: *she popped in to see if she could help.*
- [with obj. and adverbial of direction] put or move (something) somewhere quickly: *she popped a pen into the pocket of her white dress.*
- 3** [with obj.] informal take or inject (a drug).
- 4** [with obj.] Brit. informal pawn (something).

図1 pop (NODE)

語義番号1から4までがそれぞれコアセンスで、コアセンスから一段下げて黒四角(■)の後に記されているのがサブセンスである。一段下げて記述するという工夫によって、コアセンスとサブセンスとの関係が視覚的に明示されることになった。つまり、紙面がもつ空間的特性を利用してテキストに2次元的な構造化を与えているのである。

このような空間的配置と呼応するように、サブセンスの定義は、コアセンスとの関連性を明らかにするよう心がけている。たとえば、コアセンス1のサブセンスには“cause (something) to burst, making such a sound”という他動詞用法の定義が最初に挙げられている。この定義は、談話の結束性の観点からいえば、指示(“such”), 繰り返し(“make”, “a sound”), およびコロケーション(“explosive”と“burst”との縁語的關係)によってコアセンス1の自動詞用法(“make a sudden, sharp, explosive sound”)と明示的に結びつけられている。意義関連を説明的な定義によって意識的に明示し、さらに、意義関連の構造化を視覚的に表示している点において、これまでに言及した学習者用英語辞典よりもNODEは先を歩んでいる。

さらに、NODEの進歩性は、意義拡張のパターンを3つに限定し、体系的

に記述しようとした点にも見られる。NODE が分類した意義拡張の 3 つのパターンとは、(a) 比喩的拡張 (figurative extension of the core sense), (b) 特殊化 (specialized case of the core sense), そして (c) その他の意義拡張 (other extension or shift of meaning) の 3 つである (ix-x)。この 3 分類は、おおまかにいえば、本稿でいうメタファー・シネクドキー・メトニミーにそれぞれ対応している。意義拡張のパターンをこのようなかたちで辞書冒頭に記したのは、NODE が最初ではないだろうか。NODE は、多義の理論に裏付けられた記述をそれと分かるかたちで試みているのである。

とはいえ、この 3 分類に問題がないわけではない。辞書の解説には簡単な例示しかないので確定的なことはいえないが、これまでの辞書編修の伝統にとらわれすぎて、意義拡張の分類に NODE は正確さを欠いているようなのだ。たとえば、(a) の比喩的拡張は、冒頭の解説を見るかぎり、一般の辞書が fig. (CIDE) や figurative (OALD 6) という表記によって示している意味変化——メタファー的拡張のなかでも比喩性の高いもの——と同じである。したがって、「(食事が) 軽い」という意味での light のように慣用度の高いメタファーの例がどのカテゴリーに分類されているのかについては疑問を残す。さらに、(b) の特殊化も、専門用語に関心が偏っており、従来の辞書における technical (COBUILD 3, LCODE 3, OALD 6) や specialized (CIDE) が示す内容と大差ない。また、(c) のその他の意義拡張は、いわゆる「ゴミ箱」的な扱いになるだけに問題を残す。

たしかに、いくつかの欠点はあるものの、NODE が多義語の記述において他に抜きん出ているのは紛れもない事実である（上に見た意味拡張の分類における問題点も、意義拡張のパターンを明示する必要がないだけに、実際的な問題とならない）。NODE の辞書学に対する功績は、コアセンスとサブセンスという概念を導入し、多義語に見られる意義構造の階層関係を明らかにしたことと、その階層関係を紙面上に見てははっきりと分かるかたちで提示しえたことにある。オックスフォードに流麗な定義を期待する者はこの辞書に

落胆することもあるかもしれないが、この辞書がもっとも力を入れた多義語の記述は、高く評価できる。

4. 検索の簡便さを求めて：LDOCE 3に見る使いやすさの原理

さて、前節で見たように、学習者用英英辞典で採用されている説明的な定義方法は、多義語を記述する点ではパラフレーズ式の定義よりも、はるかに有利であった。しかし、学習者用英英辞典においてそのような資質が、多義構造の記述に存分に生かされているとはいいがたい。それどころか、辞書の使いやすさ (user-friendliness) を高めるためにおこなった改訂が、多義語の意義記述には障害となっているようなのである。そこで、この節では、学習者用英英辞典のなかでも中心的な存在である LDOCE 3 とその前身である LDOCE 2 とを比較してみることにする。LDOCE の 3 版改訂に際して、特に留意されていたのは、[1] 目指す意義にすばやく行き着ける、および、[2] 複雑な記述をなくす、の 2 点である。この 2 項目と多義記述との関係を検証してみよう。

4.1 目指す意義にすばやく行き着ける

目指す意義にすばやく行き着けるために、LDOCE 3 が採ったおもな変更点は次の三つに集約できる。(a) 見出し語の立て方を改める、(b) 頻度順によって定義を配列する、(c) 意義の概略を示す標識——「道標」(sign-post)——² を設ける、の 3 点である。このうち、多義を解説するにあたって

2 「道標」は、定義に先立ち、語の大まかな意味を記す。図 2 を例にとると、語義番号の後に黒三角で囲まれた強調表示がこれにあたる。道標では、“MONEY”や“RIVER/LAKE”というように定義文に用いられた語を 1 語ないしは数語挙げるのが通例である。(道標に挙げる語彙は、定義文で使われていなくとも、定義文中の語とたいていコロケーションで結びつく「縁語」である。)あるいは、4 番の“blood/sperm/organ etc bank”のようにコロケーションを手がかりとして挙げることもある。どちらにしても、前節で示した結束性の観点からすると、「道標」は見出し語およびその定義文と形式的にも意味的にも密接に結びついている。その点においては、結束性の強い構造性をもったテキストを構成するのに役立っており、多義語の意義構造を記述するうえで障害とはならない。さらに、多義語の意味を一覧するのに便利なので、同音異義語がかかわらないかぎり、多義語の理解にも資するものである。

問題となるのは、(a), (b) の前者ふたつである。

まず、見出し語の立て方については、2版から大きな変更が加えられた。bank を例にとると、2版では「銀行」の意の名詞、その動詞用法、「土手」の意を表す名詞、その動詞用法、そして「一並び・一列」の意味の名詞、からなる合計5つの見出し語が挙げられている。つまり、語源が異なる場合は同音異義語 (homophone) として別個の語彙とし、さらに同根の語彙であっても名詞用法と動詞用法の区別がある場合には、それらを別の語彙として扱う、というふたつの方針によって見出し語が挙げられている。これに対し、LDOCE 3は基本的に同音異義語の存在を認めない辞書である。後者の方針、つまり、品詞の区別のみによってLDOCE 3は見出し語を区別する。したがって、「銀行」の bank と「土手」の bank は同じひとつの語という扱いになる。LDOCE 3からの引用を図2に掲げる。

1番目と4番目・7番目の意義は「銀行」もしくは「銀行」から拡張されたもので、互いに関連がある。これに対し、「土手」もしくは「土手」に係する意義は2・3・5・8の4つを数える。さらに、「一並び・一列」の bank は6番の意義が対応する。このように、LDOCE 3においては、3種類の関連のない意義が混ざり合っ提示されている。多義語の意味構造を理解する上では、非常に都合の悪い配列になってしまった。同じひとつの語なのか、それとも別の語なのかという情報は、語の意味を理解するにあたって重要であるが、LDOCE 3はそのような情報を意図的に切り捨てている。

このような方針をとった背景には、辞書の利用者がどのようなか

- bank¹ /bæŋk/ n [C]
1 ► **MONEY** ◀ a) a business that keeps and lends money and provides other financial services: *The major banks have announced an increase in interest rates.* b) a local office of a bank: *I have to go to the bank at lunch time.*
2 ► **RIVER/LAKE** ◀ land along the side of a river or lake: *Roger pushed the boat away from the bank* —see SHORE¹ (USAGE).
3 ► **PILE** ◀ a large pile of earth, sand, snow etc: *There were steep banks of snow at the sides of the road.*
4 **blood/sperm/organ etc bank** a place where human blood etc is stored until someone needs it
5 **cloud/fog bank etc** a large mass of clouds, mist etc
6 **bank of televisions/elevators/computers etc** a large number of machines, television screens etc arranged close together in a row
7 ► **GAME** ◀ the money in a GAMBLING game that people can win —see also **break the bank** (BREAK¹ (32))
8 ► **ROAD** ◀ a slope made at a bend in a road or RACETRACK to make it safer for cars to go around

図2 bank (LDOCE 3)

たちで求める意義を探し出すのかを分析した結果があるのであろう。学習者が辞書を利用する最大の理由は意味を知りたいからである。では、どのようにして自分の求める意味を辞書から探し出すのか。語の綴り（もしくは発音）と品詞の区別はその際に学習者にとって間違いの少ない手がかりとなる。ところが、同音異義の区別は綴りと品詞ほど学習者にとって明確な手がかりとはなりえない。逆に、同音異義を区別しなければ、複数の見出し語にわたって目指す意義を探し出す必要がなくなる。そこで綴りと品詞の別のみを基準として見出し語を挙げることにしたのであろう。（加えて、LDOCE 3では、道標が導入されたので、検索する枠が広くても問題ないとの判断もあったのではないか。）

目指す意義をすばやく探し当てるための第2の仕掛けは、頻度順にしたがった定義の配列である。辞書利用者は1番目の定義から求めるものを順に探していくので、使用される確率の高い順番に定義を並べれば、目的とする定義を効率よく見つけられる、との発想が頻度順配列の背景にある。もっとも、見方を変えれば、よく使われる意義ほど重要である、とも考えられる。

しかし、効率よい検索を目指したものであれ、意義の重要度によるものであれ、単純な頻度順配列は多義語の意味を記述するうえで障害となる。たとえば、動詞 defuse の意義として LDOCE 3は「(危機・緊張を) 緩和する」の意を最初に挙げ、より基本的な意義と考えられる「信管を抜く」は第2の意義として記述している (Meer (1997))。ひとつの原則にのっとり体系的な記述とはいえるものの、母国語話者の直感にそぐわないのは明らかである。学習者が多義語に通底するニュアンスを理解する際にも妨げとなるだろう。Meer (1997, 1999) も強調しているように、メタファーによる意義拡張の場合、拡張された意義のみを知るだけでは、その意義の持つニュアンスを理解したことにならない。使用頻度が低いことから2番目に挙げられている文字通りの意義「信管を抜く」は、1番目の意義を理解するために必要な前提である。単純な頻度順配列にはこのような教育的な、もしくは十全な理解

のための配慮が欠落している (CEED や CIDE はこの点に関して評価できる)。

4. 2 複雑な記述をなくす

辞書記述にあたっての複雑さや略号などを廃し、辞書冒頭の解説を読まなくとも辞書本文の記述が容易に理解できるようにすることも、検索の簡便さを向上させるための方策である。見て分かりやすい記述をおこなうために LDOCE がおこなった改訂についても言及しておこう。図 3 と図 4 は形容詞 *healthy* の項からの引用である。

両者を比較すると、第 3 版はさまざまな点で改善されていることに気づく。道標 (signpost) が導入されたことに加えて、定義はこの項目にかぎらず全般にわたって正確かつ読みやすくなった。さらに、コロケーションを明示し、用法上の制限や例文に注解を加えるなど、辞書としての全体的な使いやすさは明らかに向上している。しかし、多義構造を記述する点に関しては、後退しているといわざるをえない。まず、第 2 版の記述の概要を明らかにしてみよう。

(8) は第 2 版に見られる意義記述の構造化を図式化したものである。

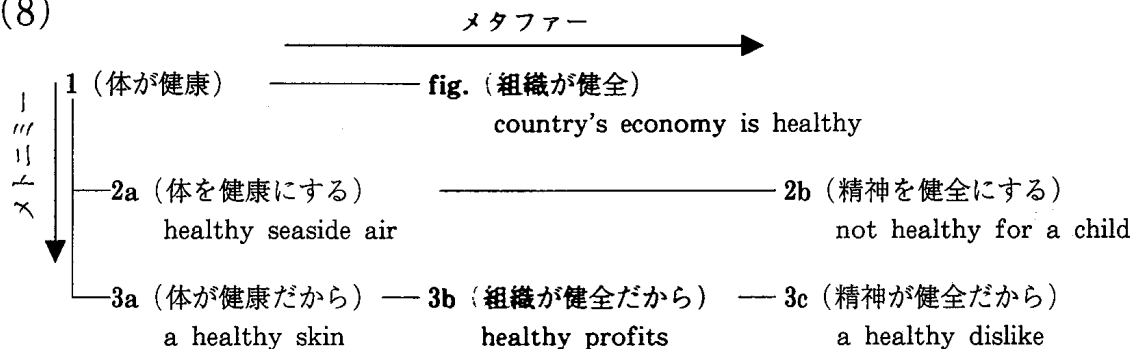
healthy /'helθi/ *adj* **1** physically strong and not often ill; usually in good health: *healthy children* (fig.) *The country's economy is not very healthy.* **2** a likely to produce good health: *healthy seaside air* **b** good for the mind or character: *That book is not healthy reading for a child.* **3** **a** showing good health: *a clear healthy skin* | *a healthy appetite* —opposite **unhealthy** **b** showing a good or favourable condition: *healthy profits from our overseas operations* **c** showing a strong or sensible character; natural: *The children have a healthy dislike of school* | *a healthy disrespect for these silly rules.* —*ily* *adv* —*iness* *n* [U]

図 3 *healthy* (LDOCE 2)

healthy /'helθi/ *adj*
1 ► **PERSON/ANIMAL** ◀ physically strong and not likely to become ill: *a healthy baby boy* | *I've always been perfectly healthy until now.*
2 ► **MAKING YOU HEALTHY** ◀ likely to make you healthy: *a healthy diet*
3 ► **GOOD FOR YOUR CHARACTER** ◀ [usually in questions or negatives] good for someone's mind or character: *I don't think it's healthy for her to spend so much time alone.*
4 ► **SHOWING GOOD HEALTH** ◀ showing that you are healthy: *Her face had a healthy glow.* | *a healthy skin* | *a healthy appetite* (=a desire to eat a lot)
5 ► **COMPANY/SOCIETY ETC** ◀ a healthy company, society, economic system etc is working effectively and successfully: *The economy is looking quite healthy now.*
6 **a healthy respect/contempt/curiosity etc** a natural and sensible feeling: *a healthy contempt for silly regulations*
7 ► **AMOUNT** ◀ large and showing that someone is successful: *By the end of the year we should make a healthy profit.* —*healthily* *adv* —*healthiness* *n* [U]

図 4 *healthy* (LDOCE 3)

(8)



「体が健康である」ことをいう1が中心義である。この1からメタファーを介して「組織やシステムがうまく機能している」という意義が拡張されたことがfig.という記号によって示されている。次に、中心義「体が健康」と2aの「健康によい」(“likely to produce good health”)とが結びつけられる。この意義拡張は「健康である」という結果の状態をいうことで「健康によい」という原因を表すメトニミーである。そして、「精神や性格によい(影響を与える)」(“good for the mind or character”)という2bは、「からだの健康に良い」という2aになぞらえたメタファーである。

3aは2aと対をなす意義拡張、つまり、原因で結果を表すメトニミーである。からだ本体が健康であるという原因があるので、その部分である肌や髪の毛もよい状態に保たれているという結果が成り立つ。これを逆に言えば、肌や髪の毛がからだ本体の良好な健康状態を示す(“showing good health”)という第2版の定義のようになる。さらに、3bと3cは、3aからのメタファー的な拡張である。これは、2aと2bの関係と並行的である。3aはからだに言及する具体的な意義であるが、3bは一般的な状況という少し抽象的な意味合い、そして3cは人間の精神的な状況つまり性格や態度に関わる意義となっている。

まとめると、(8)に図式化した縦への意義拡張にはメトニミーが介在し、横への広がりにはメタファーを介した意義拡張を表している。このような構造的性を示し得たのは、語義番号にアルファベットと数字を併用したこと、およびfig.(=figurative)という表示によって比喩的拡張を明示したことの2

点によるところが大きい。³

ところが、LDOCE 3の healthy に関する記述においては、その両方が取りやめられてしまっている。その結果、大きく3つのまとまりに分けられていた意義群は、fig. によって示されていた意義も含めて、すべて独立した意義としてひとつずつ提示されることとなった。たとえば、「組織が健全である」の意義は、5番目の意義として、それとは直接的なかわりを持たない2つの意義「健康そうな (showing good health)」と「自然な (showing a sensible character)」とのあいだに割って入る格好になった。このように、LDOCE 3では、意義の関連性を無視して定義が配列されたため、healthy がもつ多義構造を読み取りにくくなってしまったのである。

ここで留意しておきたいことは、語義番号にアルファベット使用を控えたことと fig. の表示を廃止したことは、healthy の項にのみ見られる偶然ではない、ということである。解説を読まねば理解できないような要素はできるだけ排除し、「見てパッと分かる」シンプルな記述をめざすというのが、近年の学習者用英英辞典に見られる傾向である。実際、LDOCE 第3版が数字とアルファベットを併用して語義番号の提示する頻度は、第2版におけるよりもかなり低くなっている。また、fig. のような省略をもちいた表示や記号は、第2版においては65種類あったのに対して、第3版では半数以下にまで減じられている (LDOCE の表紙見開きにある Short Forms and Labels の項を参照)。要するに、使いやすさを向上させるという目的のために、意義の関係を明示する fig. は取りやめとなり、記述の構造的性を示す数字・アルファベット併用も見送られたわけである。

本来、多義構造を示すことと使いやすさを求めることとは、両立しえない

3 3の語義解説をすべて“showing...”という形式に統一し、定義間に結束性をもたせたことも、第2版の記述の構造的性に寄与している。第3版においても、4番目と7番目の定義は“showing...”という形式を繰り返しているが、2版におけるように隣接して提示されているわけではないので、注意しないと気づかない。

2版の記述は、このように意義関係をうまくとらえてはいるが、そのことが読者にじゅうぶんに伝わるかどうかは別の問題である。図3にあるように、LDOCE 2表記は、(8)に表した構造を分かりやすく伝えるだけの紙面上の工夫がなされていない。

ことはないはずである。しかし、LDOCE の改訂結果を見るかぎり、多義の記述は軽視されているといわざるをえない。個々の定義においては説明的定義の利点を生かした解説が見受けられるものの、多義構造を体系的に示す努力は放棄されているのである。

5. 英和辞典の動向

3 節で指摘したとおり、文や節のかたちで説明的な定義をおこなう（学習者用）英英辞典に比べて、訳語というかたちでパラフレーズ主体の定義をおこなう英和辞典は、個々の意義を関係づける有力な体系的手段をもたない。そのため、形容詞の light（「(重量・食事・負担・読み物が) 軽い」）や名詞 morass（「沼地」→「泥沼 (= 苦境)」）のように、同種の比喩的拡張が日本語の対応語にも見られるような場合を除けば、多義語の定義は断片化する傾向にある。最近の英和辞典には、多義語の意味を説明するためにさまざまな工夫が施されているが、その背景にはこのような意義断片化に対する懸念がある。

さて、英和辞典が取り入れている多義記述のための工夫には、ふたつの方向性がある（なお、Nakao (1989) を参照）。ひとつは、多義語の意義発展を別記事にして大局的に記すもので、『カレッジライトハウス英和辞典』（＝『ルミナス英和辞典』）が代表的な存在である。もうひとつの方向性は、定義の関係を記し、定義全体の構造化を目指すもので、『新グローバル英和辞典』に体现されている。以下では、双方の特徴、利点、欠点について私見を述べる。

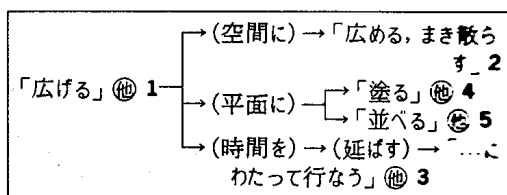


図5 spread (CL)

〈プロフィール〉

名詞の「物」「目標」と動詞の「反対する」は一見何の関係もないように見えるが、語源的にはともにラテン語の「投げつける」に由来する。投げつけられる「対象」(2), 「目標」(3)から一般的な「物」(1)を表す名詞となり、比喩的に「問題を投げつける」から「反対する」という意味の動詞が生まれた。なお、「反対する」の名詞は objection となる。

図6 object (SA)

5.1 意義記述のトップダウン戦術：『カレッジライトハウス英和辞典』を中心に

『カレッジライトハウス英和辞典』(CL)は多義語の歴史的な意味変化を樹形図のかたちで表し、定義とは別の囲み記事にして本文記述の前に提示している。CLはこれを「語義の展開」と呼んでいる。図5はCLのspreadからとった。かぎカッコ内が代表的な定義(訳語)で、数字は辞書本文の語義番号に対応する。また、意義関係を理解するためのヒントを丸がっこで囲んで示している。空間、平面、時間という概念を手がかりに、意義の発展がまとめられており、とても分かりやすい。これに対し、『スーパーアンカー英和辞典』(SA)は、「プロフィール」と呼ばれる囲み記事で多義語の意味の流れを文章で説明している。図6は名詞 object からとった。名詞 object と動詞 object との関係や名詞 object の意義拡張が通時的に説明されている。もっとも、SAの「プロフィール」は記述内容が歴史的変遷にとどまらない。例は省くが、歴史的変遷について言及する際には「原義」ということばを、現代語の語感を取り入れる場合には「基本義」ということばをそれぞれ使い分けているようだ。

このような方法の利点としては、以下の2点が考えられる。

第一に、断片化する傾向のある定義群も、通時的な意味変化を後づけるなど、意義構造の大局を示せば、定義から失われていた個々の意義関連を示しうる。つまり、パラフレーズ式定義の欠点を克服するにあたってCLなどが採用したのは、不向きな部分——各意義の局所的関連性をボトムアップ的に示す——をトップダウン的な記述によって補うという方策である。ことに、CLは樹形図によって図解するので、関連づけるべき意義がさして多くない場合には、意義の関係を一望できる。

次に、意義構造を歴史的変遷に基づき大局的に示す場合、局所的な関係づけが困難なことがらも記述できる場合がある。たとえば、図6では、同音異義語として認識されがちな名詞 object と動詞 object との意味関係が明快に

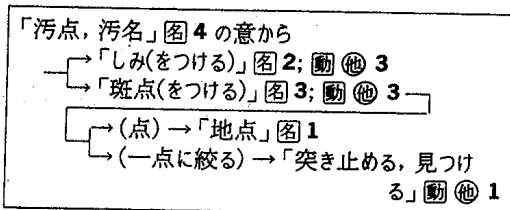
述べられている。同音異義語の語源上の同一性は、多義語記述の範囲外ともいえるが、学習者にとって有益な情報であることには変わらない。そして、この種の情報は、定義とは別記事によって歴史的に説明する以外に提示する方法がない。

しかし、問題点もある。2点取り上げる。

まず第一に、定義本体の断片化傾向はやはり改善されない。定義本体については手つかずのままなのである。理想をいえば、意義の関連づけを個々の定義のレベルでおこなったうえで、必要に応じてトップダウン式の説明を設けるべきである。しかし、局所的な関連づけに難点のある定義方式を補うために、それとは別個のトップダウン式の説明を導入したのであるから、定義本体が改善されないのは仕方ないともいえる。したがって、もし、定義本体の断片化については問わないのなら、本来ボトムアップ的な意義記述をおこなう定義の部分と意義拡張の大局を示すトップダウン的な部分とが、どの程度まで有機的に結びついているかによってこの種の辞典の可否を判断すべきなのだろう。

第2の問題点は、まさにその点——定義とトップダウン的記述との関連性——についてである。『カレッジライトハウス』の「語義の展開」は歴史的な意義展開の順序に基づいているため、本文における定義の配列順序（頻度順）としばしば一致しない。図7は、CLのspotの項に付された「語義の展開」である。定義の順番とほぼ逆の順序となり、1番目の語義が最後に挙げられている。冒頭に付された「語義の展開」と定義本文では別個の原理がはたらいっているため、（定義本文に対応する語義番号が付されているというものの）双方を別個に理解していく必要がある。「語義の展開」を語源的な補足説明と割り切れれば問題ない（そして、そのような補足説明はたしかに重要である）が、定義部分と同じ順序で展開されているほうが読者の理解は容易であるだろう。

spot /spát | spót/ (SPÖT)



— 図 (spots /spáts | spóts/)

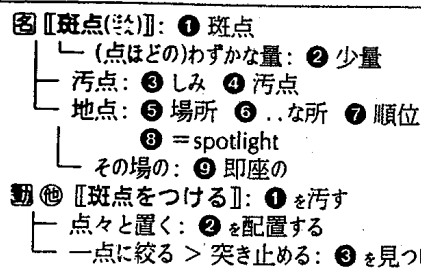
1 ㊦ (特定の)地点, 所, 場所; 点, 個所; (ある)部分, 局面: a holiday *spot* 行楽地 / a popular beauty *spot* 観光の名所 / This is the (exact) *spot* where the accident occurred. ここが(ちょうど)事故の起こった現場だ / X marks the *spot*. X印がその(事故などの)現場を示している / There was one bright *spot* in her miserable life. 彼女のみじめな生活にひとつだけ明るい面があった. [関連語] blind *spot* 盲点.

2 ㊦ しみ, よごれ, 汚点: There is a *spot* on your tie. 君のネクタイにはしみがついているよ.

3 ㊦ 斑点(せみ), まだら: a black cat with white *spots* 白い斑点のある黒猫 / a white dress with blue *spots* 青の水玉模様の白い服. [関連語] sun-spot 太陽の黒点. 4 ㊦ 汚名, 汚点, (人格などの)きず: The incident left a *spot* on his reputation. その事件は彼の名声に汚点を残した. 5 ㊦ (組織の中での)地位, 序列; 職; 立場. 6 ㊦ (放送などの)出演, 出番; (番組の特別コーナー; (番組間の)短い放送, スポット(広告): She got a guest *spot* on the program. 彼女はその番組でゲスト役をもらった. 7 ㊦ ほくろ; できもの, にきび. 8 ㊦ 《略式》スポットライト (spotlight). 9 [形容詞的に] その場での, 即座の: *spot* cash 即金. 10 ㊦ しずく, 水滴. 11 ㊦ 《略式》歓楽の場所: a night *spot* ナイトクラブ. 12 ㊦ 《米略式》(ある数の)トランプ札; ... (ドル)札: a ten *spot* 10ドル札.

図 7 spot (CL)

spot: [spat/spot]



— 名 (種 ~s [-s]) ㊦ ① 斑点, ぶち, まだら ▶ My dog is white with brown *spots*. 私の犬は白地に茶色のぶちです / She wore a white scarf with green *spots* on it. 彼女は緑の水玉模様の白いスカーフをしていた.

② (a をつけて) 《主に英・口語》少量, 少し, 《of...の》 ▶ Would you care for a *spot* of tea? お茶でもちよつといかがですか / Let's do a *spot* of work before we rest. ひと休みする前に少し仕事をしよう.

③ (インクなどの)しみ, 汚れ, 汚点; (肌の)しみ, ほくろ; 《遠回しに》にきび, 吹き出物 ▶ The spilled tea left a *spot* on her dress. こぼれた紅茶で彼女の服にしみができた.

④ (人格, 名声などの)きず, 汚点 ▶ a *spot* on his reputation 彼の名声についた汚点.

⑤ 場所, (ある特定の)地点, 箇所; (事件などの)現場 ▶ a good *spot* for a picnic ピクニックに好適な場所 / Land's End is a beautiful *spot*. ランズエンド岬は美しい場所です / the very *spot* on which Kennedy was shot to death ケネディが射殺されたちょうどその場所.

⑥ 《形容詞をつけて》...な所, 箇所 ▶ a sore *spot* 人に触れてはしくない点.

⑦ 《口語》(序列の中での)位置, 順位, 地位; (プログラムの中での)出番.

⑧ 《口語》= spotlight.

⑨ 《形容詞的に》即座の; 番組の間に入れる(広告放送など).

派生 形 spóttý.

図 8 spot (GC)

この点に関して示唆的なのが, 同じくトップダウン式記述を採用している『グランドセンチュリー英和辞典』(GC)の記述方法である。GCは, トップダウン記述における順序と語義の配列順序を一致させている。図8は, GCのspotからとった。囲みの部分と本文とで語義の並びが一致していることが見て取れる。歴史的順序や頻度順による配列をおこなわず, 共時的な意味の関連を反映させるよう心がけた結果であろう。また, 囲み部分において名詞用法の意義と動詞用法の意義とは別々に関連づけられているが, これは定義部分の記述と対応させたためである。CLの語義の展開では動詞と名

詞の意義とが混在していたのと対称的である。トップダウン項目と定義本文との関係が明瞭なので、双方を往復しながら視線を走らせてもあまりストレスを感じさせない。GCの記述が分かりやすいのは、同一項目内にふたつの異なった原理（頻度順配列と歴史的配列）がはたらくのを避け、当該項目の一体化・首尾一貫性を高めたことにある。

4.2 構造化の試み：『新グローバル英和辞典』

前節でみたトップダウン式の解説は、英和辞典にありがちな定義の断片化を別の観点から補おうとする手法であった。『新グローバル英和辞典（第2版）』（NG）のとった方法は、意義記述を構造化しようとしている点において英和辞典で唯一ともいえる存在である（ただし、姉妹版の『グランドセンチュリー』は部分的に同様の手法を

採用している）。NGの手法について考察してみる。

NGは共時的な意義関係をとらせ、その構造化を示すことに努めている。その機軸となるのが、「本義」と「分義」の設定である。図9は、NGのpitchから他動詞にかかわる記述だけを抜いたものである。本義は「いくつかの語義の根底にある基本的意義」（xiii）と説明されている。

pitch ¹ /pitʃ/ ④ (pitch-es /-əz/ ④ ⑤ ⑥) ~ed /-t/ (pitch-ing) ④ 【わらって投げる】 1 【投げる、ほうる、(運動) 一定方向に正確に投げる; →throw】; ⑤ 【(～X into Y) Xを急にY(状態)に陥れる。Pitch the newspaper onto the porch. 新聞をポーチに投げておいてくれたまえ。The whole audience was ~ed into utter confusion. 全観衆は大混乱に陥った。 2 【野球】を投球する; (試合)の投手を務める。～ a fast ball 速球を投げる。～ a perfect game 完全試合をする。 3 【わらって打つ】 【ゴルフ】(ボール)をピッチショットする。【わらいを持って話す】 4 【主に米話】(品物)を(強引に)売り込む、宣伝する。 5 【話】(話、言い訳など)をする。～ a tale [yarn, line] ほら話を聞かせる。【定まった場所に投げる>固定する】 6 【(杭(い)など)を地面に打ちこむ、立てる。 7 【テントなど)を張る。～ a camp キャンプを張る。 8 【ある位置に据える、置く。 9 ④ 【楽】(曲、楽器)の高さ[音程]を調節する(in ... [ある調子]に)。～ the strings a little higher 弦楽器をやや高めに調弦する。【定める】 10 ④ の高さを定める、レベルを置く、(at, to ... に)。～ one's hopes too high 高望みし過ぎる。 11 【傾斜を定める】(屋根など)を傾斜させる。

図9 pitch (NG)

4 GCにおいても語彙によっては、トップダウン項目において品詞の区別がおこなわれないこともある。たとえば、hangでは他動詞用法と自動詞用法が混在したかたちで関連づけられている。定義部分との対応が見られない場合は、読み通すのにそれだけ時間がかかる。

なお、GCのわかりやすさは、「樹形図」のデザインによるところも大きい。提示すべき意義の数が増えても、下へ下へと順次「枝」を延ばしていけばよいからである。他方、もっぱら水平方向に広がるCLの「樹」は、意義の数が多いときには紙面に収まりきらず、spotにおけるように折り重ねなければならない。したがって、樹形図本来の視覚的な明快さを欠くこともある。

図9において、語義番号の左に【】で囲って提示されているのが本義である。第2、第3の本義（「ねらいを持って話す」「定まった場所に投げる>固定する」）は、第1の本義（「ねらって投げる」）と結びつき、第4の本義（「定める」）は、第3の本義（「固定する」）と関係づけられることが、語彙（や漢字「定」）の繰り返しによって明示されている。また、「定まった場所に投げる>固定する」というように、関係が分かりにくい場合は、不等号によってふたつの要素が結合させられている。他方、語義番号の右側に【】に入れて示してあるのが分義である。図9では、語義番号3の「ねらって打つ」と11番の「傾斜を定める」がこれにあたる⁵。分義は本義と定義（訳語）との仲立ちをつとめている。たとえば、11の「傾斜を定める」は第4本義「定める」を特殊化させ、本義「定める」と定義「〔屋根など〕傾斜させる」とのあいだの意味のギャップを埋めている。このような工夫の結果、意義が多岐にわたり、一貫した理解がむずかしい動詞 pitch の意味が整然と表されている。

このように、NGは、本義>分義>定義（訳語）という階層構造によって、意義関係を段階的に説明している。まず、本義によって意義構造の大まかな枠組みを知らせ、そして分義によって個々の意義の関連を説明し、訳語によって具体化させる、という具合である。また、複数の分義もしくは定義をひとつの本義が統括できるので、意義の階層構造を示すのにも都合がよい。たとえば、動詞 stuff の「(投票箱)に不正投票をする」という意義は、訳語を眺めるのみでは、ほかの語義と関連づけがむずかしい。しかし、「物を詰める」という本義に統括させた上で、「にせ物を詰める」という分義の説明を介すると、意義関係がはっきりする。単なる「モノ」ではなく「ニセモノ」

5 xiii ページ VII-3には、分義の説明として「分義とは本義の上に形成される意義で、具体的には訳語として現れるが、訳語にすぐ結びつかないときは、前に【】を置いて補足する」とあるので、【】内は補足説明で分義は訳語のことを指すともとれる。しかし、VII-1の記述には「多義の語を中心に『本義』と『分義』をそれぞれ【】、【】に入れて示す」とあるので、【】内を分義として扱う。したがって、本義>分義>定義（訳語）の順で意義が記述されているものとする。

また、NGには本義>分義>定義の記述方式以外にも意義拡張を示す手法として、引用符を伴った訳語の提示がある。たとえば、「a mist of doubt」におけるような mist の語義が比喩的意味拡張であることを示すために、「霧」というふうに訳語を提示している。

を詰めるという、特殊化の例として解釈できるわけだ。要するに、本義＞分義＞定義という構造軸を導入することでNGは、多義語の意義記述に構造化をもたせたわけである。すでに説明的定義のところであつたように、多義語の意味のように一定の構造化をもつものを記述しようとした場合、構造化豊かなテキスト形式を採用したほうがはるかに有利なのである。

このことを示すよい例が、『新グローバル』の改訂状況に見受けられる。次の(9)、(10)は、NGの初版と第2版のpictureの項から語義にかかわるところのみをそれぞれ抜粋したものである。

- (9) 1 絵, 絵画; 画像
 2 写真
 3 (テレビ, 映画の) 映像; イメージ
 4 (言葉による) 写実的な描写; (絵を見るような) 生き生きとした記述
 5 絵のように美しいもの [人, 光景], 景観
 6 生き写し, そっくりなもの; (性質などの) 具現, 化身
 7 (個々の) 映画 (motion picture)
 8 状況, 事情, 事態 (situation)

(『新グローバル英和辞典』初版: picture)

(10)	本 義	分 義	定 義
	描かれたもの	1	絵, 絵画
	映 像	2	写真
		3	(テレビ, 映画の) 画面, 画像
		4	(個々の) 映画 (motion picture); 【主に英旧話】 <the~s> 映画 (の上演); <~s> 映画界 [産業]
	心的映像	5	<普通, 単数形で> イメージ
		6 イメージを作るもの	(言葉による) 写実的な描写; (絵を見るような)
		7 全般的イメージ	生き生きとした記述 <the~> 状況, 事情, 事態 (situation)

絵に描いた 8	絵のように美しいもの [人, 光景], 景観, 見物 ..の生き写し, ..にそっくりなもの; (性質などの) 具現, 化身, ..を絵に描いたようなもの
ようなもの 9	

(『新グローバル英和辞典』 2 版 : picture)

初版の picture の項は本義>分義>定義という構造枠が導入されていない。その結果、意義のまとまり具合がいまひとつぼやけたかたちでしか伝わらない。「写真」「映像」「映画」の3つの意義は、やはり第2版におけるようにひとまとまりにしたほうが分かりやすいし、同様に「心的映像」および「絵に描いたようなもの」という本義は全体の理解を容易にしている。一定の記述枠が与えられていなかった初版では意義構造が不明瞭にしかとらえられていなかったことを考えると、本義>分義>定義という意義記述の構造枠を導入したことが、多義語の意味構造全体を分析し直す契機となったようである。このように、定義をおこなうにあたって採用したテキスト形式は、定義が表現しうる内容に必然的に影響する。多義語の意義構造を体系的に説明するためには、まず、辞書記述のテキストをうまく構造化する必要がある。

NG が採用した意義記述方式の利点をもう一点挙げるとすれば、紙面上のスペースをさほどとらないことである。省スペースであるがゆえに多くの語にこの記述方式を導入できる。事実、NG の本義分義式の記述は、『カレッジライトハウス』や『スーパーアンカー』が大局的な記述を見送った多義語についても積極的におこなわれている。また、大局的な記述の場合は、意義の数が多くなると主要な意義のみを説明の対象とする（図7のCLにおけるspotを参照）ことになるが、NG は記述方式の性格上、すべての意義を本義（のどれか）に統括させることになる。したがって、説明されないままに終わる意義はありえない。（それゆえ、意義拡張の仕組みが分かりづらい意義についても常に何らかの説明を求められることになる。）

さて、上で見たように NG の多義記述は優れたものであるが、問題がまっ

たくないというわけではない。今しがた述べた省スペース性が問題を引き起こすこともある。スペースを節約するために、NGでは本義・分義とも短い語句のかたちで提示しているが、提示できうる情報量が限られているので、説明に際してときに職人芸的な手際が要求されている。たとえば、形容詞 hard で与えられた本義は以下の通りである。「物が）かたい」「質が硬い」「難しい」「耐えがたい」「耐えがたい＞激しい」「動かしがたい」。日本語の「かたい」がもつ多義性を利用し、漢字の書き分けを駆使し、最小限の情報量で関連性を示している。hard は、そういった職人技が成功している例であるが、次の sanction はどうか。sanction の本義と定義の部分だけを抜き出すと、下のようになる。

(11) [本義] 権力による許可／[訳語] 認可，裁可；承認，許可

[本義] 無許可＞違反への処罰／[訳語] (違反者に対する) 制裁，処罰；
(法などに従う者に対する) 褒賞

ある行為が権力によって許可されているという事実を裏返せば、許可が認められない行為、つまり違反行為をおこなえば当該の権力によって処罰もありえるということになる。そこで、その処罰・制裁という意味も sanction が担うようになった。おそらく GN の執筆者はそうように考えたのだろう。しかし、これだけの内容を本義に与えられる小さなスペースに納めるのはむずかしい。実際、(9) の記述は、厳密に言えば、そのような内容を伝えてはいない。「権力による許可」という本義に並列された「無許可＞違反への処罰」という表示は、ほかの項目における不等号の使い方に照らし合わせるなら、sanction が「許可」の意味から「無許可」の意義を獲得し、さらに「違反への処罰」へと転化したかのように解釈されるはずである。このような表記上の間違いは、伝えるべき内容が豊富であるにもかかわらず、説明を語句レベルにまで切りつめる必要があるという事情にその一因を求めること

ができる。

6. おわりに

多義語の意味構造を記述するには、各意義の局所的な意味関連を示す必要がある。その点において、学習者用英英辞典で採用されている説明的定義は、英和辞典がおこなう訳語置き換え式の定義よりも明らかに有利である。しかし、有利な状況にあるからこそ、学習者用英英辞典は多義記述のための特別な工夫を必要としなかった。4節で見たように、LDOCEに代表される学習者用英英辞典では、各意義の個別性が高まった結果、意義の関連づけや統合化が逆に阻害される傾向にある。説明的定義がもつ優位性は、じゅうぶんには生かされていない。

他方、英和辞典が採用する訳語置き換え式の定義は、テキストとしてのまとまりを欠くことが多いため、伝える情報も断片化する傾向にある。英和辞典が近年取り入れつつある多義記述に関する工夫は、意義の断片化に対する懸念から生まれたものである。しかし、そのような工夫のなかでも、各意義の局所的な関連づけに特に注意を払っているのは、『新グローバル英和辞典』(NG)のみであった。というのも、訳語置き換え方式の定義を堅持したまま局所的な意義関係を示しうるような手だては、NGの本義<分義<定義式の記述を除けば、有力なものが思い当たらないからであろう。NGが採り入れた構造化手法は、見方によれば、説明的定義が本来持ち合わせている利点を訳語置き換え方式の定義にもたらしするための方法であるともいえる。本義と分義の区分を導入することで、説明の機会を増やしたと考えるわけである。

ならば、英和辞典に説明的定義を部分的に、つまり、重要な多義語にかぎって、導入するのも多義を記述するためのひとつの方法であるはずだ。説明的な定義を提示したうえで、訳語を改めて提示するのである。多義語記述の理想を追求するとそのような結論にいたる(瀬戸(2001)を参照)。英和辞典はこれまで一様に訳語(と用例)によって意味を説明する方式を守ってきた

が、英和辞典が訳語置き換えの定義のみをしなければならないという必然性はない。たしかに、説明的定義は訳語置き換え方式よりも多くのスペースを必要とする。しかし、『カレッジライトハウス』がかなりの紙面を割いてまでも意義構造を表示する樹形図を導入した経緯を考えるなら、説明的定義の部分的な導入もあながち無謀な試みとはいえない。ことに、英英辞典を使いこなすまでにはいたらない学習者には、多義語にかかわらず、意義を説明すべきではないだろうか（鈴木（1973）を参照）。“teach”＝「教える」といった訳語置き換え式の意味理解を盲信した結果、「電話番号教えて」を“Will you teach me your telephone number?”とやってしまったような例に出くわすと、つとに意義を説明する必要があるのである。

取り扱ったおもな辞書

CEED: *Chambers Essential English Dictionary*. London: Chambers. 1995.

CIDE: *Cambridge International Dictionary of English*. Cambridge: Cambridge University Press. 1995.

CL: 『カレッジライトハウス英和辞典』研究社. 1995.

COBUILD 3: *Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners, 3rd Edition*. London: Harper Collins. 2001.

GC: 『グランドセンチュリー英和辞典』三省堂. 2000.

LDOCE 2: *Longman Dictionary of Contemporary English, 2nd edition*. London: Longman. 1987.

LDOCE 3: *Longman Dictionary of Contemporary English, 3rd edition*. London: Longman. 1995.

NG: 『新グローバル英和辞典』第2版. 三省堂. 2001.

NODE: *The New Oxford Dictionary of English*. Oxford: Oxford University Press. 1998.

SA: 『スーパー・アンカー英和辞典』学研. 1997.

参考文献

Bogaards, Paul. 1996. “Dictionaries for learners of English.” *International Journal of Lexicography* 9, 277-320.

Brugman, Claudia. 1997. “Polysemy.” In Verschueren, Jef and Jan-Ola

- Östman (eds.) *Handbook of Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins. 1-26.
- Fillmore, Charles J. 1989. "Two dictionaries." *International Journal of Lexicography* 2, 57-83.
- Geeraerts, Dirk. 1994. "Historical semantics." In Asher, R. E. (ed.) *The Encyclopaedia of Language and Linguistics*. London: Pergamon. 1567-1570.
- Halliday, M. A. K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar, Second Edition*. London: Edward Arnold.
- and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Herbst, Thomas. 1996. "On the way to the perfect learner's dictionary: A first comparison of OALD5, LDOCE 3, COBUILD2, and CIDE." *International Journal of Lexicography* 9, 321-357.
- 柏野和佳子・本多啓. 1998b. 「多義構造を辞典に書く」『日本語学』17, 54-63.
- Meer, Geert van der. 1997. "Four English learner's dictionaries and their treatment of figurative meanings." *English Studies* 6, 556-571.
- . 1999. "Metaphors and dictionaries: The morass of meaning, or how to get two ideas for one." *International Journal of Lexicography* 12, 195-208.
- Nakao, Keisuke. 1989. "English-Japanese learner's dictionaries." *International Journal of Lexicography* 2, 296-314. (中尾啓介『辞書学論考』研究社, 1993に所収.)
- 村田年. 1981. 「英和辞典における語義記述の方法」『千葉大学教養部研究報告』B-14, 101-116.
- 佐藤信夫. 1978. 『レトリック感覚』講談社.
- 瀬戸賢一. 1997a. 『認識のレトリック』海鳴社.
- . 1997b. 「意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一『文化と発想とレトリック』93-177. 研究社出版.
- (Seto, Ken-ichi). 1999. "Distinguishing metonymy from synecdoche." In K. Panther, Klaus-Uwe and Güner Radden (eds.). 1999. *Metonymy in Language and Thought*. Amsterdam: John Benjamins. 91-135.
- . 2001. 「理想の英和辞書 (2): 意義関係を記述する」『英語青年』147, 81-83.
- 柴田省三. 1975. 『語彙論 (英語学大系 7)』大修館.
- 鈴木孝夫. 1973. 『ことばと文化』岩波新書.
- Tuggy, David. 1993. "Ambiguity, polysemy, and vagueness." *Cognitive*

Linguistics 4:3, 273-290.

田中茂範. 1990. 『認知意味論：英語動詞の多義の構造』三友社.

Taylor, John R. L. 1995. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Second Edition. Oxford: Clarendon Press.